

研究概要報告書【音楽振興部門】

(1 / 1)

研究題目	平安末期・鎌倉期の舞楽左方舞の動作様式 一その音楽と舞を再現する一	報告書作成者	田 歙 智志
研究従事者	田 歙 智志		
研究目的	<p>雅楽は、奈良時代から平安時代初期(あるいはそれ以前)より、中国大陸・朝鮮半島より輸入され、あるいは、日本人による作曲も加えられて、以来こんにちまで脈々と伝承されてきましたが、こんにちの雅楽は、平安時代初期の仁明朝(在位 833～850)の頃以来、大きな変化なく伝えられてきたものであると一般にいられています。しかし、『源氏物語』(1000 年頃成立)をはじめとして中世にかけての多くの物語・楽書・日記等にみられる雅楽の音楽・舞に関する記述は不可解な点が目立ちます。これに一石を投じたのが、ローレンス・ピッケンらケンブリッジ大学の雅楽研究グループでした。ピッケンは、今の雅楽の骨格的音の進行が、舶来した当時の大陸的なメロディーとなっていることを発見しました。端的にいえば、千年以上の歳月をかけて、極端にまで“まのび”した音楽が、いまの雅楽である、と彼らは主張しました。物語・楽書・日記等の記述から推察しても、大陸的なメロディーそのものを奏していた時代は、中世にまで及んでいたと私は考えています。</p> <p>ピッケンの“内在する大陸的なメロディー”の発見から、すでに半世紀以上もの歳月が経過しましたが、日本国内ではいまだに認知されていません。雅楽の音楽が、こんにちとは全く異なるものであったのですから、当然、舞の所作もこんにちの舞楽とは著しく異なっていたと考えます。当時の音楽とおもに舞も再現することが本研究の目的です。</p>		

研究内容

私は、2010年より、藤原師長の箏譜『仁智要録』をはじめとする平安末期の雅楽古譜の再現演奏を試みてまいりました。それは、ピッケンらの論説を基盤としながら、私自身の史料解釈も盛り込んだ演奏です。来年度は、平安末～鎌倉期頃に興福寺属楽家の伯氏が相伝した舞譜『掌中要録』などから、当時の舞を再現させる試みもスタートさせました。

本研究では左方舞譜『掌中要録』、箏譜『仁智要録』、横笛譜『管眼集』、笙譜『古譜呂律卷』などの平安末期から鎌倉期に撰述された舞譜・楽譜、そして『教訓抄』『続教訓抄』といった同時代の楽書・口伝書をはじめとして、舞絵などの図像史料、日記・物語類にみる楽舞の記述などを総合的に解釈し、当時の楽舞の再現を試みました。現行の伝承そのものも(生きた)歴史資料のひとつではありますが、考察対象外としました。

今回は『掌中要録』に収録されている平舞(走り舞・武舞にくらべて穏やかに舞うもの)演目のなかから、(序破急にいうところの)破に相当する演目を対象としました。破に相当する曲については、平安中期から鎌倉期にかけてリズムの変遷がみとめられます。具体的には、平安後期頃から、舞楽用のリズム「楽拍子」が考案されて、たいして旧来のリズムは「只拍子」とよばれるようになり、同じ曲でも2様のリズムで演奏されるようになりました。舞の再現もさることながら、この「只拍子」「楽拍子」がそれぞれどのようなリズム奏法であったのか、解明する必要があります。本研究では舞動作解明と並行して、2様のリズムについて私なりの見解をまとめました(結果、先行研究の見解とは大きく異なりました)。

鎌倉時代にはいると破の演目のうち只拍子で舞うものは一部の武舞・走舞演目に限られ、平舞の演目はもっぱら楽拍子での舞いのみが伝承されるようになります。しかし、『万歳楽』のみは、楽拍子の舞い方に加えて、只拍子の舞い方も一部分伝承されていました。『掌中要録』にもその両様の舞譜が記されています(様式10参照)。そこで本研究では、只拍子・楽拍子両様の《万歳楽》を再現してみました。

<p>研究のポイント</p>	<p>本研究において、平安末期～鎌倉期頃の舞楽《万歳楽》再現にあたって、研究のポイントは以下5点です。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 拍子構造の検討: 只拍子・楽拍子のそれぞれがどのようなリズムであったのか検討しました。 2) 『掌中要録』に使用されている動作名目一去肘・伏肘・披・呂乙・違肘・延立・押足などが具体的にどのような動作をさしているのか(時代的変遷もふくめて)検討しました。 3) 上記2に関連して、同時代の図像史料(舞絵)などからも基本的姿勢や各動作名目の動きを推定しました。 4) 当時の舞楽の最も特徴的動作である足踏動作は、『掌中要録』中には大文字動作のタイミングを示す補記として、「左足」「右足」と散見されますが(様式10参照)、それら記されている足踏以外の“足踏”がどのようなパターンを形成していたか検討しました。 5) 上記4に関連して、上肢動作が、リズムパターンのなかの何拍目に行われるのか、足踏みパターンとあわせて検討しました。
<p>研究結果</p>	<p>研究の成果として実演付きレクチャーを2月28日(でんおん連続講座E)に開催しました。また、講演の実演と概要を日本伝統音楽研究センターホームページ内に動画つきで掲載しました。</p> <p style="text-align: center;">http://w3.kcuu.ac.jp/jtm/archives/takuwa_gakudan/20150203manzairaku.html</p> <p>「日本伝統音楽研究センター」ページトップ画面の「伝音アーカイブズ」をクリック→「南都楽家の舞譜『掌中要録』を舞う その1～」をクリック</p> <p>研究結果について、詳しくは伝音アーカイブのほうをご覧くださいたく存じます。私は大学院修士以来、『掌中要録』に記された舞の実態について考えてきましたが、考察結果を実演するところみは今回が初めてのことでした。また、楽のリズムに関しては、これまで私なりに検討する機会がありませんでしたが、今回、リズムと舞動作の双方を同時に考察したことで、リズムにかんしても私独自の知見をうることができました。現行伝承は参照しない研究方法を貫いた結果として、現行とは著しく様式のことなる楽・舞が浮かび上がってきました。そして、平安後期から鎌倉期にかけての音楽リズム様式、動作様式に変遷もあきらかにすることができました。</p>
<p>今後の課題</p>	<p>今回、再現した《万歳楽》は破のみの曲で序や急の楽章はありません。序・急がある演目も今後再現を試みていきたいと思えます。急の舞のリズムには楽拍子様はなく、急はまたちがった趣があったようです。またいくつかの演目には舞ながら退場していく演出—入綾—もありました。『掌中要録』には入綾時の舞い方を記した舞譜も記されています。今後は、急の舞や入綾の再現も視野にいれていきたいと思えます。</p> <p>一方、楽拍子の問題ですが、鎌倉時代には舞楽ではない時(管絃の御遊など)でも楽拍子で演奏することもあり、またもともと舞のない曲を楽拍子で演奏されるようにもなります。その場合、舞の音楽としての楽拍子とは、すこし違う拍のとりかたをしていたように思われる記述もあります。拍子構造についても今後検討すべき点は多々あります。</p>

萬歳樂一二五帖拍子各世

一帖

北向天手合天延立右足落居天右足曳入諸去肘

左足下合左足曳入披天延立右足落居西向天諸
手係合左足披左足右伏肘左押足東向右侧披天
諸手係合右足披天右足左伏肘右押足北捻向天
右手入左足腰掃右足右去肘打加右足右押足左
足踏右足出落居天南見西向天右足踏出延立左
足落居南向天右手面係左足左呂し右足右呂し
左足寄右去肘右足係寄右足係披右足右押足北
向左廻西捻天左手指天北向天右伏肘右足
半帖前十拍子之片答也北向天手合天延立左足
右足

同曲只拍子様

北向天右伏肘右足披天左伏肘左足下天右去肘
右足下天左去肘左足振天東向天左違肘左足南
二寄天下右足振天西向左廻右違肘右足南二寄
天下天右足腰掃天北向諸去肘左足面係諸伏肘

右足 又披天東向天諸腰付天右見
又披天西向天諸腰付天左見右膝突様

懸右肩立天北向天右伏肘右足下天右去肘右足
二寄天前下左足又右伏肘右足東向右手指右足
踊北向天左伏肘左足下天左去肘左足左寄天下
右足又左伏肘左足西向天左手指左足踊

紅葉山文庫本『掌中要録』（内閣文庫蔵）より《万歳樂》樂拍子様第一帖舞譜の前半部分（右）、同本より《万歳樂》只拍子様（左）

